

# 中東問題を観る眼

朝日カルチャーセンター・新宿教室

若林 啓史

## 講座の全体像

第1回 中東の人は全員イスラーム教徒？ 中東の少数宗教 その1：ゾロアスター教

第2回 中東の人は全員イスラーム教徒？ 中東の少数宗教 その2：ユダヤ教

第3回 中東の人は全員イスラーム教徒？ 中東の少数宗教 その3：東方キリスト教

第4回 イスラームは偏狭な宗教？ 寛容な宗教？ 中東の多数宗教・イスラーム

第5回 中東は部族社会？ 中東の社会構造 その1

第6回 中東は宗派で分断されている？ 中東の社会構造 その2

第7回 中東は男尊女卑？ 中東とジェンダー

第8回 中東の国々はどこも産油国？ 石油問題と中東観のかたより

第9回 中東に民主主義は根付くのか？ 中東民衆の政治参加

第10回 イスラエルと湾岸アラブ諸国は手を結ぶのか？ 中東の新たな対立構造

第11回 日本外交における中東の重みは？ 中東外交の黄昏

第12回 なぜ日本の中東論文は英語で書かれるのか？ 戦後日本の中東研究

## 【中東地図】



## 第5回 中東は部族社会？

### 中東の社会構造 その1

2023年5月25日



写真 欧州人のアラブ「部族」像

VERNET, Emil-Jean-Horace (1789-1863), *Chefs arabes dans leur camp*, 1834  
1830年、仏軍はアルジェ近郊に上陸、アルジェリア征服を開始した。上陸後数年間、仏軍の支配地は限定され、食糧や弾薬の補給をも、占領地域内外の現地住民に依存していた。ルイ・フィリップ1世の宮廷画家であったヴェルネは、1833年5月アルジェリアを旅行、「オリエンタリズム」と分類されることになる、異国情緒溢れる画風の作品を発表した。1847年にアルジェリア征服を完遂したオマール公は、軍功を回想するため、この絵画を後年買い上げた

#### 1 「中東は部族社会」という認識

- 「中東の諸民族は本質的に砂漠の遊牧民で、その社会は部族長が率いる上意下達 of 部族社会である」という認識は、かつて『アラビアのローレンス』などの映画や文芸を通じて浸透し、最近では中東情勢を解説する専門家によって、繰り返されてきました
- しかし実際には、中東社会は古代オリエントの時代に築き上げられ、現代に続く都市文明を基盤にしています。都市文明は、遊牧民の社会と、むしろ対極にあるといえます
- 都市においては、人間関係は血縁関係以外の、職業や地縁、学閥、宗教など、あらゆる要素により、網目状に構成されます。「部族社会」論者が想定するような、血族が一丸となって行動する単純な社会では、全くありません。なぜこのような誤解が蔓延したのか、という疑問に答えながら、中東の都市文明の実像を解説します



写真 「アラブの叛乱」 1917年1月撮影

第一次世界大戦が始まると、メッカのアミールであるフサインは、オスマン帝国に従うか、離反してアラブの独立を目指すか迷った。イギリスは、マクマホン・エジプト高等弁務官を通じ、「フサイン・マクマホン書簡」と呼ばれる文書の往復で、フサインと交渉した。フサインは、英仏側について叛乱を起こす腹を固め、1916年6月5日挙兵した。フサインが糾合した部隊は遊牧民から構成され、英仏が用意した金貨をあらかじめ与えなければ動かなかった。カイロ諜報局アラブ局所属のローレンス大佐（1888-1935）らが、「アラブの叛乱」を誘導した。イギリスが叛乱軍に支給した金貨の総額は、1100万ポンドと見積もられている

## 2 中東生活圏の図式的理解

- 中東の生活圏は、極めておおまかに見ると、「都市」（および周辺の農村）と「荒野」に分かれています
- 「都市」は、古代から続く都市文明を担う、都市民の社会です。「都市」は、「荒野」の中に点在し、両者は、島と海の関係にたとえられます
- 都市民にも、家族や血族を単位とする行動様式は存在しますが、それ以外の職業や地縁、学閥、宗教など、複雑な人間関係が形成されています。そのため、都市には「市民社会」と呼ぶことのできる公共空間が存在しています。都市民には、都市生活の複雑さに鍛えられた「個人主義」の方が、顕著に観察されます
- 一方、「荒野」には遊牧民の社会があり、厳しい自然環境に集団で適応する目的や、20世紀前半まで、遊牧民の隠れた生業であった略奪行為に際し、必要な規模の集団を即時に編成する目的から、いわゆる「部族主義」が温存されてきたことは事実です
- 近年、遊牧民の定住が進み、「荒野」でも「部族主義」は消滅しつつあります



写真 エルサレム北東「スコーパス山」に陣取る英陸軍砲兵連隊 1917年頃撮影  
 第一次世界大戦の緒戦において、オスマン帝国軍は、ダーダネルス海峡近くのガリポリに上陸した英仏軍を撃退し、イラクのクートに籠城した1万人の英軍を降伏させるなど、激しく抵抗した。従って、オスマン帝国からアラブ地域を奪ったのは、一般に信じられているような「アラブの叛乱」ではなく、重火器や航空機まで投入したイギリスの軍事力であった。イギリスのエジプト遠征軍司令官アレンビー大將は、オスマン帝国軍を追撃して1917年12月9日、エルサレムを占領した。「アラブの叛乱」の外観は、占領地支配を見据えた政治工作であった

### 3 イスラーム世界の伝統的「部族」観

- そもそもイスラームは都市文明・商業活動を背景に発生した宗教であり、イスラーム以前の遊牧社会に根ざす、「部族主義」的風習を批判していました
- すなわち、全てのイスラーム教徒は、アッラーに絶対的に帰依することとされ、イスラーム社会は、アッラーが預言者を通じて下した啓示により規律されます。イスラームの世界観において、因習に従って人々を支配する「部族」の役割は、どこにもありません
- さらに、イスラームの拡大に伴い、「アラブ」に血統的優越を読み込む思想は否定され、異民族からの改宗者との平等が徹底されました
- もっとも、イスラーム世界の著述家には、「部族」に積極的意義を見出した者もありました。イブン・ハルドゥーン（1332-1406）は、『歴史序説』において、「都市」と「荒野」の生活圏の違いを認識し、都市民と遊牧民の対比に着目した文明論を構築しました
- イブン・ハルドゥーンは、集団の「アサビーヤ」（求心力）という概念により、王朝や文明の興亡を説明しようとしていました。「荒野」における「部族」は、「アサビーヤ」が旺盛な人々でした。彼の考える「部族」は、単に血縁関係にある有力者集団のみならず、それらの従者や、同一の祖先に属すると考えて連合する人々を含みます。諸部族の角逐を通じて強大な王朝が形成され、都市文明を生み出します。しかし、都市民は次第に懦弱に陥って「アサビーヤ」が低下し、「荒野」から新たに興る王朝に取って代わられると説きました。彼の理論は、「部族主義」再評価の先駆けと理解することができるでしょう

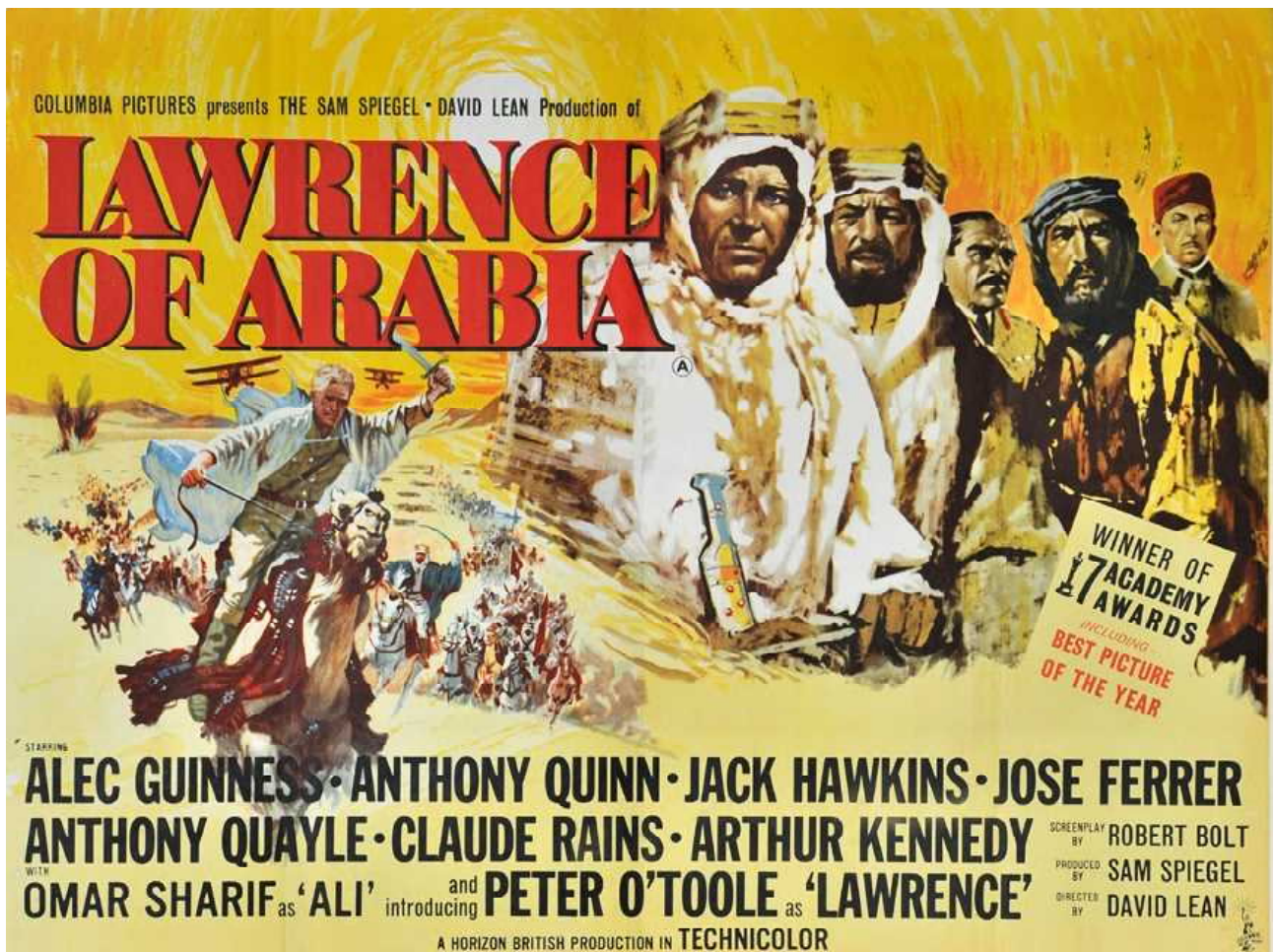


写真 『アラビアのローレンス』 1962年公開

ローレンス大佐は、「アラブの叛乱」に関する回想録を執筆、初稿の紛失や書き直した原稿の一部削除など苦心の末、1926年に『知恵の七柱』初版を刊行した。これにより、誇り高いアラブがオスマン帝国の圧政に反旗を翻し、義侠心に満ちたローレンス大佐が支援する「アラブの叛乱」の虚像が形成された。大英帝国の利益のため、アラブ「部族」を傀儡に仕立てた諜報活動は隠蔽された。1962年、回想録は『アラビアのローレンス』の名で映画化され、世界的な成功を収めた。一方で、「アラブ」は砂漠の「部族」であるとの歪んだアラブ観が拡散し、彼らの子孫であるアラブ王制諸国の建国神話を補強した

#### 4 「部族」という言葉のなりたち

- そもそも、「部族」という言葉は、欧州の人々が自らの世界を「文明」、非欧州の世界を「野蛮」と対比させた上で、未開社会の構造を認識するため編み出した概念です
- 欧州人の発想では、未開社会は血縁関係、または擬似血縁関係に基づいた集団から構成されています。小規模な集団は、上位の集団に所属し、大規模な集団を形成します。欧州人は、これらを「部族」と認識し、「部族」内部は「部族長」の支配に服していると仮定しました。欧州列強が「未開社会」を植民支配する際には、「部族長」と交渉することにより、「部族長」配下の全構成員を意のままに扱うことができると考えました
- 今日の人類学では、未開・野蛮という含意のある「部族」の用語は避けられています。家族より上位の血縁集団、ないしは共通の祖先を有すと信じている人々の集団を、特に政治的結束に着目してより中立的に示す場合、これを「氏族」(clan)と呼んでいます



写真      ルーズヴェルト大統領と会談するアブド・アルアズィーズ・サウジアラビア国王  
スエズ運河の米艦上で1945年2月14日撮影

イギリスは、支配下に置いたアラブ諸国を王制に誘導し、「部族」勢力に王家を支えさせた。これに対し、世俗的ナショナリズムやイスラームを掲げるアラブ民族主義者は、植民支配の障碍であった。民族主義を封じるため、王制や「部族主義」が活用された。アラビア半島では、イギリスはサウード家を支援して権力の座に就けた。第二次世界大戦末期に中東への本格的進出を始めたアメリカは、イギリスの支配方針を踏襲した。ルーズヴェルトがアブド・アルアズィーズ国王を会談相手に選んだのは、偶然ではなかった

## 5 植民支配に活用された「部族主義」

- 中東に、欧州式の「部族社会」観が浸透するに至ったのは、列強による中東支配が本格化する19世紀以降のことです。特に英仏がオスマン帝国のアラブ地域を分割した第一次世界大戦後、顕著になりました
- それまで、欧州列強は、オスマン帝国内の特定の少数宗教・宗派を自国の代理勢力に選び、これへの保護権を名目に介入を図りました。その当時、中東は「宗派社会」観で見られていたのです
- 列強は、アラブ地域を分割すると、植民支配を補強する、現地代理勢力を必要としました。宗主国が支援してきた少数宗派と共に、「荒野」を活動の舞台にしていた「部族」が、現地代理勢力に相応しいと考えられました
- 都市のアラブ民族主義者や、多数宗教であるイスラーム教徒は、植民支配に批判的でした。宗主国は、本来脆弱な現地代理勢力を選んで過大な権力を与え、彼らが宗主国を頼りながら、多数派住民の抵抗を抑圧するよう仕向けました



写真 イラク「部族長」と会談するジョージ・ウォーカー・ブッシュ大統領  
イラク・アンバール県で2007年9月3日撮影

冷戦終結後、唯一の超大国となったアメリカは、アフガニスタンとイラクを舞台とする対テロ戦争によって、反抗的な政権を倒した。しかし、長期にわたり駐留を続ける米軍に対し、武装勢力の攻撃が多発、両国への関与がアメリカの重荷になってきた。2006年、「イラク・イスラーム国」が結成された。これに対抗して、米軍は「部族」と認定した遊牧民・農民・旧バアス党员から成る自警団を作り、補完勢力とした。ブッシュは2007年9月、アンバール県を訪問し「部族長」たちをねぎらった。しかし、ブッシュと握手した「部族長」は、その10日後、あえなく爆殺されてしまった

## 6 「新部族主義」の出現

- 第二次世界大戦後、中東諸国は独立しました。ナショナリズムを掲げる政権は、植民体制を支えた「部族主義」や「宗派主義」を敵視しました。王制諸国は、「部族主義」の排除には躊躇しましたが、それでも政府による中央集権化を推進しようとしていました
- 長らく過去の遺物とされていた「部族主義」が、再び脚光を浴びるようになったのは、湾岸戦争を転換点として、アメリカが中東に軍事介入するようになってからのことです
- 特に対テロ戦争の時代、アフガニスタンとイラクに長期駐留を続ける米軍は、両国の新政権が弱体であるため、「部族」勢力に治安維持任務を補完させようとしていました
- イラクでは、アメリカの軍事力により旧政権が崩壊すると、それまで中央政府に抑圧されていた地縁・血縁に基づく土着勢力が復活の兆しを見せました。米軍は、こうした勢力を「部族」と認定し、「部族」の覚醒を賞讃、武器・資金を提供して組織化しました
- こうして、米軍は「新部族主義」による国造りを模索しましたが、成功しませんでした



写真 イラク政府に抗議するアンバール県のスンナ派「部族」  
イラク・ラマーディーで2013年4月26日撮影

イラク政府は、10万人近くに上ったスンナ派「部族」民兵を、治安機関に編入する方針を示したが、実際に職を得た者は少なかった。不満を抱いたスンナ派「部族」には、「イラク・イスラーム国」に寝返る者が数千人あり、米軍による「部族」覚醒工作は失敗した。2014年、「イスラーム国」に改称した武装勢力がバグダードに迫る勢いを示した。「イスラーム国」は、イラクとシリアの「部族」を吸収して膨れ上がった。2015年、米軍の支援を得たイラク政府軍が「イスラーム国」に反撃すると、「部族」勢力はイラク政府軍について「イスラーム国」と戦った。「部族」に政治的信念はなく、外部から提供される実利を追う集団であった

## 7 日本における「部族主義」中東観の普及

- 明治以後の日本人は、船旅で欧州を訪問する途上、アラビア半島やエジプトの風物を眼にすることになり、「砂漠」や「遊牧民」、「駱駝」を土産話にしました
- また、「オリエンタリズム」（潤色された東洋趣味）で中東を描いた欧米の文芸が翻訳され、第二次世界大戦後も『アラビアのローレンス』が好評を博すなど、実像から離れがちでエキゾチックな日本人の中東観は、長い時間をかけて形成されてきました
- 石油危機から半世紀が過ぎましたが、中東は「産油国」、かの地の人々は「砂漠の民」と理解する私たちの偏見は、未だに克服することができません
- これだけの素地が存在したところに、湾岸戦争後、「新部族主義」が欧米で急速に注目されました。これを無批判に受容した、日本の専門家や報道機関にも責任があります
- 欧米における「新部族主義」は、冷戦終結後、中東を改めて欧米中心の国際秩序に組み込んでいく問題意識に基づき、「部族」を活用しようとする政策意図がありました
- 日本における「部族主義」中東観は、それほどの自覚によるものではなく、過去の誤解の再燃、欧米の論調の受け売りに流されてしまったと見るべきでしょう。「中東は部族社会」という曲解が反省を経ずに定着してしまえば、さらなる誤認の原因になります